



©Yuki Asada

ネグロスの未来を紡ぐシルク糸

小さな部屋の中から、小刻みに聞こえてくる機織り機の音。柔らかいシルクの糸が一枚の鮮やかな布へと形を変えていく。フィリピン南部のネグロス島。日本ではまだあまり知られていないが、近年アジアで注目が高まっているシルクの生産地だ。

ネグロス島はかつて、「飢餓の島」と呼ばれていた時代があった。1980年代半ばに砂糖の価格が暴落し、さとうきびの生産に従事していた人々の生活は見る見るうちに苦しくなっていた。そこで導入されたのが養蚕業。この島の急傾斜の丘が蚕のエサとなる桑の木の植樹に適していたからだ。

しかし、島の人々は養蚕など経験し

たことがない。そこで白羽の矢が立ったのが、フィリピンで長年農業支援に取り組んでいた公益財団法人オイスカ。15年以上にわたり現地の人々と寄り添い、JICAとも連携しながら地道に技術指導を続けてきた。

生産者のリーダーは、日本の養蚕農家で訓練を受けた人々。草木で鮮やかに染められた糸は、女性たちの手により美しい布として生まれ変わっていく。「今後は生産組合の組織化の支援を通じて、技術の向上、販路開拓を目指したい」とオイスカの萬代保男事務局次長は話す。

ネグロス生まれのシルクが人々の未来を紡ぎ、島に笑顔をもたらしている。



シルク製品は、現地の女性たちが一枚一枚心を込めて織っていく

★シルク製のストールを3人、テーブルクロスを1人にプレゼント!→詳細は38ページへ

